ＩＣＴを活用した教育を学校に浸透させる
ミドルリーダーのアクション

学籍番号　159958
氏　　名　緒方　愛恵
主指導教員　山手　隆文

１．背景

「教育の情報化」といわれる時代、文部科学省ではＩＣＴ活用の柱として、教科等の授業におけるＩＣＴ活用、情報社会に対応した情報活用能力を育てるための情報教育の展開、校務の情報化の３点を挙げ、教育の情報化の推進を図っている。スクール・ニューディール構想を機に全国規模で学校ＩＣＴの環境整備が進展し、Ｏ市では、2013 年（平成 25 年）からモデル校に 2016 年（平成 28 年）からは一般校にタブレット端末、デジタル教科書などが導入された。今、学校ＩＣＴは環境整備の時代から、活用の時代に移り変わっている。ＩＣＴの利活用に関する研修・実践など数多く紹介されている先行研究からＩＣＴ活用普及の要因は教員の研修的要素、授業設計論、モチベーションの確保が重要ではないかと考えた。実際には、ＩＣＴ環境の整備が実施されたにも関わらず、ネットワーク環境の不良、機器台数の不足、人的支援の不備、教員の意識改善など、問題を抱えている。教員は環境面でも意識面でもＩＣＴ活用から回避し、利活用に消極的な状態である。

２．ＩＣＴ活用における現状と意識

子ども達に確かな学力・豊かな人間性を養い、知識を行動化する力を育むためには、子ども達の新たな学びに向けた授業デザインが必要であり、それはＩＣＴ活用において実現できると考えられる。そこで、学力向上、授業力向上に効果をもつＩＣＴ活用を教員に推進し、ＩＣＴ環境を有効に活用させたいと考えた。現代、子ども達につけたい新メディア・リテラシーとは、情報活用能力の育てるリテラシーである。このリテラシーを育成するためには、情報活用の実践力をつけるカリキュラム開発、情報教育に関するルーブリックを作成することが必要である。本研究ではＩＣＴ活用を推進し授業改善すること、ルーブリックの要素を持つ「Ｕスタンダード」を作成することなどを行い、新メディア・リテラシーをＩＣＴ活用で育てることを教員へアプローチしたいと考えた。まずは、Ｕ校でＩＣＴ活用に関する意識調査を実施した。アンケート結果から、若手教員がＩＣＴ活用に消極的なことが明らかになり、それは教員にとってＩＣＴを活用した授業設計が難しいからではないかと分析した。教員がＩＣＴを導入し、授業デザインを工夫することによって、授業の質の向上が図られ、子ども達の学力向上へと繋がる。わかる授業を創造し、学ぶ力を育むＩＣＴ教育の研究をさらに深化させていかなければならないと考えた。

３．授業改善と実践研究

ＩＣＴ活用を促した授業改善の視点は、教員によるＩＣＴ活用・子ども達によるＩＣＴ活用の２つである。若手教員たちにＩＣＴを活用した授業に数多くに出合わせることが浸透させる１つの手段であると考え、若手教員を中心に授業を積極的に公開したり、モデル授業を行ったりして、校内にＩＣＴ活用の情報提供をした。さまざまな機会を通じて、ＩＣＴ活用を教員に呼びかけることで、教育活動の中でＩＣＴを使ってみようと考える教員が増えた。研修会の開催、校内研究での授業提案、校内での実践授業や授業公開、学校行事への積極的な利活用、Ｏ市スタンダード授業モデルの作成などを実施し、事例の詳細を提示した。また、Ｕ校と同じ環境整備がされたＯ市の他校（一般校）でのＩＣＴの活用状況及びＩＣＴ活用の浸透を促すアクションは何かを調査し、Ｕ校と他校との共通点や相違点などを分析して浸透させるために有効な項目を明らかにした。Ｏ市の他校でも視聴覚主任や研究部長がＩＣＴ担当として役割を担っており、研修会を中心に公開授業をする、機器を整備する、活用支援をする、研究テーマとして位置付けるという４つのアクションが見られた。４つのすべてのアクションが加わる学校はＩＣＴ活用の稼働率を上げていることがわかった。

４．Ｕスタンダードの作成

Ｕスタンダードは、Ｕ校の教員がＩＣＴ活用をし、授業デザインしたものを集めて作成したＩＣＴ教育指導計画表である。年間を通してＩＣＴ活用を進める指標になると考えられる。これは、情報活用能力達成目標一覧表をベースに、低中高学年ごとに学習単元や活用内容を表にしている。項目は、Ｕ校の教員が協力して取捨選択し、学年別教材・教科一覧表や２年間のＩＣＴ活用アンケート集計をもとに構成されている。また、実践内容が詳細にわかるＩＣＴ活用実践事例（モデルカード）を附属させている。年間、２～３教材について授業形態・本時の目標・活用目的・学習の流れなどが詳しく表記されており、授業イメージが分かりやすくなっている。

５．ＩＣＴ活用の展望

学校におけるＩＣＴ活用の推進に関して、ミドルリーダーが教員に対し、丁寧な個に応じた支援や環境における支援などを行うことで、教員のＩＣＴを授業に活用しようと考える意欲が高まり、学校にＩＣＴ活用が浸透した。ミドルリーダーのアクションで有効であったことは、校内研究への位置づけ、優先順位を考慮した環境整備の充実、活用を支援する人材育成で、アクションを４つのカテゴリーに分類し、このようなアクションをすることで教員にＩＣＴ活用を推進させるということを実証することができた。しかし、子ども達がタブレット端末を活用して学習するという活動は実践不足であるかもしれない。タブレット端末を活用することにより、子ども達は“わかっていく過程”が可視化できる。自己肯定感が低く自分に自信が持てない子ども達が多いＵ校にとって、タブレット端末は自信と満足感をもたせることができる最適な道具となると考えられる。Ｏ市スタンダード授業モデル（視聴覚領域）や実践事例集（Ｕスタンダード）などＩＣＴ活用の指標を整えたことにより、これをもとに実践していこうとする意欲につながり、ＩＣＴ活用は受け継がれていくだろうと考えられる。今後は、子ども達がＩＣＴを積極的に活用して情報活用能力を伸ばす教育の実現に向けて新たなアクションを考え広めて、さらに学校ＩＣＴを発展させていかなければならない。